

論文要旨

保護者の保育参加に関する研究
—子育て支援における協同的な学びの視点から—

島津礼子

広島大学大学院教育学研究科

2014年

I. 論文の構成

第1章 問題の所在

- 第1節 わが国における子育て支援の潮流と課題
- 第2節 保護者の保育参加における協同的な学び
- 第3節 研究の目的

第2章 保護者の保育参加

- 第1節 わが国における保護者の保育参加の現状―諸外国の実践との比較―
 - 第1項 諸外国における保護者の保育参加
 - 第2項 わが国における保護者の保育参加の現状
- 第2節 保護者の保育参加に対する意識調査
 - 第1項 調査概要
 - 第2項 調査結果
 - 第3項 考察

第3章 研究の方法

- 第1節 理論的枠組み
 - 第1項 協同的な学びとロゴフの発達観
 - 第2項 ロゴフの3つの概念
 - 第3項 コミュニティの変容
- 第2節 研究の方法
- 第3節 先行研究の検討

第4章 保育のコミュニティへの親子の参加

―地域子育て支援センターへの親子の参加により生起する学びと揺らぎ―

- 第1節 地域子育て支援センターの活動
- 第2節 A 地域子育て支援センターの概要
- 第3節 A 地域子育て支援センターの研究手法
- 第4節 親子の参加の過程と保護者とスタッフによる協同的な学び
 - 第1項 親子とスタッフで作る遊びと保育の場所
 - 第2項 保育のコミュニティの成員としての学び
 - 第3項 保護者とスタッフが抱いていた前提を超えて
- 第5節 A 地域子育て支援センターのコミュニティの変容
 - 第1項 新しい子育て観の積み上げと揺らぎを経た学び
 - 第2項 KJ法による分析
- 第6節 小括

第5章 子どもと保育者のコミュニティへの保護者の参加

―幼稚園の保護者の「保育参加」における協同的な学び―

- 第1節 保護者の「保育参加」
- 第2節 B 幼稚園の概要
- 第3節 B 幼稚園の保護者の「保育参加」の研究手法

- 第4節 保護者の参加の過程と協同的な学び
 - 第1項 限られた参加の場としての「保育参加」
 - 第2項 「お父さん先生」, 「お母さん先生」の学び
 - 第3項 より深い子ども理解へ
- 第5節 B 幼稚園のコミュニティの変容
 - 第1項 コミュニティの揺さぶりから生起する保育の省察
 - 第2項 KJ法による分析
- 第6節 小括

第6章 子どもと保育者のコミュニティへの保護者のコミュニティの参加 — 認定こども園の保護者会活動における保護者の参加の過程 —

- 第1節 保育所幼稚園等の保護者会
- 第2節 C 認定こども園の概要
- 第3節 C 認定こども園保護者会の研究方法
- 第4節 C 認定こども園保護者会が再編された背景
- 第5節 保護者の参加の過程と協同的な学び
 - 第1項 保護者による参加方法の選択
 - 第2項 コミュニティを構成する責任の主体として
 - 第3項 「子どもの主体性の育ち」の「専有」
- 第6節 C 認定こども園の保護者会の再編によるコミュニティの変容
 - 第1項 思いを伝え合うことによるコミュニティの変容
 - 第2項 KJ法による分析
- 第7節 小括

第7章 総合考察

- 第1節 総合考察
 - 第1項 保護者の保育参加の意義
 - 第2項 保護者の保育参加の課題
 - 第3項 子育て支援への示唆
- 第2節 本研究の限界

資料 (質問紙)

引用参考文献

II. 論文の要旨

第1章 問題の所在

本研究は、子育て支援の取り組みにおいて、保護者が保育に参加する実践に焦点を当て、そこで生成される保護者と保育者による協同的な学びを明らかにすることを目的とする。子育て支援の枠組みにおいて「支援者」、「被支援者」とされる保育者と保護者の協同的な学びを明らかにすることにより、支援の前提を離れ、新たな視座を提示できると考える。それは、保護者と保育者が子どもを「共に育て合う」認識の形成のみならず、社会において子育て自体を温かく見守る視点や、子育てを社会の責務とする価値観に通じるものである。

本研究では、地域子育て支援センターの活動、幼稚園において保護者が日常の保育を体験する「保育参加」、認定こども園の保護者会が再編された過程という3つの実践を研究の対象とした。これらの実践は、いずれも子育て支援の目的を持つ取り組みである。本研究では、保護者が保育に参加することを総称して、保育参加として表す。保育所幼稚園等において、保護者が日常の保育に参加する行事は、「保育参加」と表して区別することとする。

第2章 保護者の保育参加

本章では、諸外国ならびに国内における、保護者が保育に参加する取り組みを概観し、その理念や背景について整理した。諸外国において保護者が保育に参加する取り組みが生じ、継続されてきた背景には、保育への参加が保護者の権利として捉えられていること、保護者の意向に沿った保育ができること、行政による認可や補助金等による後押しがあったことが挙げられる(池本, 2014)。しかしながら、わが国においては、保護者の保育参加は、推進されているとは言い難い状況にある。

保護者の保育参加に対する意識を明らかにすることを目的として、幼稚園2園、認定こども園3園の保護者(n=1,055)と保育者(n=69)を対象とした質問紙調査を実施した。本調査から、以下の点が示唆された。第一に、調査対象園において、保護者と保育者は、双方の保育に対して概ね信頼を置いていた。しかし、保護者がその施設を選択し子どもを入園させること自体が、園の方針に同意し、支持することを含意しており、一般的に保護者は、施設に対して意見を言う機会がないことも明らかになった。第二に、保護者は、自児のことを中心として、園の様子や保育を知りたいと希望していた。しかし、就労している保護者は保育者との関わりが持ちにくく、その思いが満たされていない人もいた。保育者は、保護者に子どもの様子や発達を伝えようとしているものの、保護者が子どもの送迎の後も園にいることを、好意的に捉えていなかった。第三に、保護者会は、活動に参加することが園環境との関わりを深めるため、肯定的に捉えている保護者もいた。その一方で、自らの意思により、保護者会に深く関わらない保護者もいた。保育者は、保護者会を園や

子どものみならず、保護者にも利益のある組織だと捉えていた。

第3章 研究の方法

本研究では、保護者と保育者による協同的な学びを分析するための理論的枠組みとして、ロゴフ (Barbara Rogoff, 1950-) の概念枠組みを用いた。ロゴフ (2006) は、発達や学習を、人々の社会文化的活動への参加のしかたが変容する過程であると捉える。そして、社会文化的活動への参加による個人の発達や学びを「導かれた参加 (guided participation)」、 「徒弟制 (apprenticeship)」、 「参加による専有 (participatory appropriation)」という3つの概念に分類している (Rogoff, 1995, 2008)。これらの概念は、人がコミュニティに参加し他者と協同することにより生起する協同的な学びを、個人間 (導かれた参加)、個人とコミュニティ間 (徒弟制)、個人内 (参加による専有) のそれぞれの観点から捉える。ロゴフは、人々がコミュニティに参加すること自体が、個人のみならずコミュニティの変容に関わると言及している (ロゴフ, 2006)。

研究の方法は、活動の観察から得た事例を中心に、ロゴフの3つの概念から検討した。併せて、保護者、保育者へのインタビュー調査と質問紙調査を実施し、その内容を KJ 法 (川喜田, 1970) を用いて分析した。最終的に、各事例における協同的な学びを表す概念図を作成した。

第4章 保育のコミュニティへの親子の参加

ー地域子育て支援センターへの親子の参加により生起する学びと揺らぎー

本章では、ある地域子育て支援センター (以下では、A 支援センターと表す) の活動に焦点を当て、活動に参加する保護者の学びと、親子の参加により生起する保育者の学び、ならびにコミュニティの変容を明らかにした。

ロゴフの「導かれた参加」の概念から捉えたとき、A 支援センターでは、親と子、スタッフが相互に関わる環境構成のもと、子育て観、保護者理解などの、協同的な学びが生起していた。「徒弟制」の枠組みでは、保護者は、A 支援センターの進行中の出来事に含まれる豊かな情報の中で、多様な子どもの発達の姿と、それに応じた保育の方法に触れていた。しかし、親子と接する中で、スタッフは保護者に対して肯定的な感情を持つだけでなく、非難や葛藤も抱え、揺らいでいることも明らかになった。揺らぎながらも向き合い、子どもを通して親を見たり、親を通して子どもを見たりしながら、双方を繋げていこうとしていた。親子が A 支援センターで質のよい保育を受けたり、人間関係を形成できた時、他の集団に参加したり、子どもが就学したりした後も、その思いが持続する可能性が示唆された。

第5章 子どもと保育者のコミュニティへの保護者の参加

—幼稚園の保護者の「保育参加」における協同的な学び—

本章では、ある幼稚園における保護者の「保育参加」に焦点を当て、保護者と保育者による協同的な学びと、コミュニティの変容を明らかにした。

「保育参加」は、園の日常に保護者が身を置く形態であった。子ども、保育者、保護者が共に自然体でふるまい、保育という生活の一場面を共有する活動であった。保育者は、保護者が参加することで、日常とは異なる子どもの姿を見て、より深く子どもを理解していた。また、保護者が他の子どもたちへ接する姿を目にすることにより、その家庭の子育て観を理解していた。子どもの遊びに保護者が加わり、発展したり展開したりすることは、保育者にとっても新たな気づきが得られていた。これらは、保育の質とも関わり、子どもの利益に資する学びである。

しかしながら、共有が困難な部分も明らかになった。子どもの挑戦を尊重したり、保育者と子どもにより構成される環境に教育的価値があるという保育者の信念は、保護者に理解されにくいことが明らかになった。また、「保育参加」の中で保護者が子どもの一側面を目にすることにより、ラベリングが生じる可能性も明らかになった。これらは、保育者が自らの保育を省察する契機となり、「保育参加」のありかたを考え直す機会となった。

保育者は「保育参加」や保護者会活動などを肯定的に捉えながらも、園が設定した枠組を超えて、保護者が園に留まったり保育に関わったりすることを好意的に捉えていないことが明らかになった。その理由には、保育者と子どもにより構成される環境に教育的価値があるという信念のみならず、子どもの保育に対する責任の所在が曖昧になる点、参加する保護者の態度やマナーの低下が子どもに影響を及ぼすことへの懸念などの要因があった。このような傾向は、保護者が保育に参加する権利や意識が希薄である、わが国の保育の特質や課題とも関連している。また、今日の保護者の傾向や、一人の保育者に対する子どもの人数比が大きい、わが国の保育環境を反映しているものと思われる。

第6章 子どもと保育者のコミュニティへの保護者のコミュニティの参加

—認定こども園の保護者会活動における保護者の参加の過程—

本章では、幼稚園から認定こども園への移行を機に、保護者会のありかたが見直され、保育への保護者の参加のしかたが変容していった、ある認定こども園（以下では、C園と表す）の保護者会の長期的な過程を研究の対象とした。

C園保護者会の再編により、保護者の保護者会への参加のしかたは、それまでの一律的な関わりから、保護者それぞれの選択に任されるようになった。保護者会活動への参加は、その活動に深く関わる保護者には、自己肯定感や充実感を得たり、園環境を知る機会となり得ていた。保護者会の周縁に留まる保護者には、活動に参加すると子どもの日常の姿や園の保育なども見えることから、保護者会や園のコミュニティに親近感を抱く機会となっていた。

しかし、保護者会の周縁に留まる保護者にとって、依然として保護者会は身近な存在とは言えず、何をしているのかわからない部分があるという意見もあった。これは、保護者会自体は順調に運営されているようであっても、一部の保護者の思いや姿が、保護者会や園に伝わっておらず、理解されていないことを意味する。このような、コミュニティの周縁に留まる保護者の思いを、すくい繋げていく経路が必要であると思われる。

C園の新しい保護者会は、園側の要望を取り入れ、保護者が思いを持って保育に関わるというものではなく、子どもの生活や保育の環境の整備などで補佐的に関わろうとするものになった。これは、保護者の意見、要望を積極的に保育に取り入れる形ではなく、園の主導に保護者が沿ったものである。前章で取り上げた幼稚園においても、保護者が保育に参加する枠組みは、園により規定されていた。諸外国に目を向けると、保護者の意向を保育施設の運営に反映させている事例や、保護者の代表が集まり地域の学校や保育施設のありかたを討議する協議会が設置されている国もある（池本，2014）。わが国において、このような事例はごく一部であり、保育への保護者の意見の反映は限られている現状が、C園においても明らかになった。

第7章 総合考察

本研究により得られた知見を、次に示す。

第一に、本研究で検討した3つの実践において、保護者の保育参加により生起する、保護者と保育者の協同的な学びが明らかとなった。保護者が保育に参加する取り組みでは、保育者と保護者が共に保育の場におり、互いの保育観や保育方法に触れ、参照し合う機会を持つ。本研究で検討した3つの取り組みにおいて、ロゴフの概念を用いた分析により、保護者、保育者が個人として固定した役割を果たすことに留まらない、コミュニティ全体の役割を視野に入れた学びや、コミュニティの変容が明らかになった。これらの学びやコミュニティの変容は、「共に育て合う」意識の醸成、省察の生起など、子どもの利益や保育の質とも関わるものも含まれていた。その一方で、子育て観や理念が共有されにくい事項も明らかになった。子どもの主体性の尊重や、子どもと保育者の相互作用が持つ教育的価値などについては、子どもや園のことを知り、子どものために何かしたいと願う保護者の思いと相反し、伝わりにくい側面があった。

第二に、保護者と保育者、ならびに保護者間の子育て観の非対称性が明らかとなった。保育者は、保育に対する信念や理念を保持し、カリキュラムに基づいた専門性を発揮して子どもの日々の保育にあたっている。保護者が保育に参加することによって、自身との子育て観との間に齟齬や差異を感じた場合、揺らぎや葛藤のみならず、時には保護者を非難する気持ちも生じていた。保護者間にも子育て観の非対称性は存在していた。保護者には、子どものために何かしたいという強い思いを持つ人もいる。逆に、保育に関わる利益と不利益を学び、コミュニティの周縁に留まる選択をする保護者もいる。こうした子育て観の

不一致に対し、継続的に双方の思いを伝え合うことや、コミュニティの周縁に留まることを選択した保護者の思いをすくっていく経路が必要であろう。

第三に、保育のコミュニティの変容における、葛藤し揺らぐことの意義である。地域子育て支援センターや幼稚園の「保育参加」の事例では、葛藤や揺らぎは、コミュニティが変容する淵源ともなり得ていた。また、保護者会の検討過程でも見られたように、固定化した組織と関係を問い直すことにより表出する意識や課題があった。これらの葛藤や揺らぎ、潜在する意識や課題について、保護者・保育者間で真摯な議論を行い、時には保育や子育て、組織などのあり方も含めて本質的に問い直すことも必要であろう。その議論の過程が、保護者のコミュニティへのより深い関心や所属感、保育者の保護者理解をもたらすと思われる。

保育への保護者の参加に対する課題は、以下の点が明らかになった。第一に、顕在化した課題に対し、多くは園側の主導により、保護者との合意形成が図られていた。それは保護者が園に対し、自分の意見を伝えられる場は、限られていることを意味している。あるいは、保護者がその園を選び、子どもを入園させたこと自体が、園の方針に対する合意とも受け止められている。

第二に、保護者の保育参加に対して、必ずしも肯定的ではない意見も見られた。保護者が保育へ参加する度合いが深まることで、家庭と園との境界が薄れ、子どもの自立心の発揮を妨げる可能性もあるという指摘があった。ゆえに、幼稚園、認定こども園の事例では、保育者が意図的に保護者の参加を規定したり、制約を設けたりしていることも明らかになった。すなわち、わが国の保育の場においては、子どもを保護者と分離することが、子どもの最善の利益に繋がると捉えられている。これらの点は、諸外国との比較において、保護者が保育に参加する権利や意識が希薄な、わが国の保育の特質であると考えられる。子育て支援を、保護者の自助努力の発揮やエンパワメントを含むものとするならば、以上の課題とどのような調整を図るのか、慎重に考えていく必要がある。

本研究では、ロゴフの3つの概念を用いて検討したことにより、保護者の参加のしかたの変化や、保護者と保育者による協同的な学びを捉えることが可能となった。しかしながら、ロゴフの概念は、参加に焦点が当てられることから、コミュニティの周縁に留まる人々の思いや学びが反映されにくいことが明らかになった。これは、ロゴフの概念の限界であると考えられる。

保護者が保育者と共に保育を行う中では、保護者の子育ての不安が肯定感に変わるなどの確かな効果があった。その意味で、子育て支援の取り組みが果たす子どもと保護者を支える役割は大きいと言えるであろう。しかし、本研究が提示した保護者の参加により生起する協同的な学びと保育のコミュニティの変容は、子育て支援の枠組みにおいて「支援者」と「被支援者」とされている保育者と保護者を、子どもを「共に育て合う」主体と主体、あるいは共に保育のコミュニティを形成する者として捉え直すことを可能にする。

III. 主要参考文献

- Epstein, J. L. (2001) *School, Family and Community Partnerships*. Boulder, Westview Press.
- 池本美香 (2014) 『親が参画する保育をつくる：国際比較調査をふまえて』勁草書房.
- Joynes, W. H. (2005) A Meta-Analysis of the Relation of Parental Involvement to Urban Elementary School Student Academic Achievement. *Urban Education*, (40) 3, pp.237-269.
- 松永愛子 (2012) 『地域子育て支援センターのエスノグラフィー：「親子の居場所」創出の可能性』風間書房.
- OECD (2012) *Starting StrongIII: A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care*. Paris, OECD Publishing.
- 大宮勇雄 (2006) 『保育の質を高める：21世紀の保育観・保育条件・専門性』ひとなる書房.
- 尾崎新 (編著) (1999) 『「ゆらぐ」ことのできる力：ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房.
- Rogoff, B. (1990) *Apprenticeship in Thinking: Cognitive Development in Social Context*. New York, Oxford University Press.
- Rogoff, B. Mistry, G. Goncu A. & Mosier, C. (1993) *Guided Participation in Cultural Activity by Toddlers and Caregivers*. Chicago, University of Chicago Press.
- Rogoff, B. (1995) Observing Sociocultural Activity on Three Planes: Participatory Appropriation, Guided Participation, and Apprenticeship. Wertsch, J. V. del Rio, P. & Alvarez, A. (Eds.), *Sociocultural Studies of Mind*. pp.139-164, New York, Cambridge University Press. Reprinted (2008) in K. Hall & P. Murphy (Eds.), *Pedagogy and practice: Culture and identities*. London, Sage.
- Rogoff, B. (2003) *The Cultural Nature of Human Development*. New York, Oxford University Press. (ロゴフ, B. (著) 當眞千賀子 (訳) (2006) 『文化的営みとしての発達：個人, 世代, コミュニティ』新曜社.)
- 汐見稔幸 (2008) 『子育て支援の潮流と課題』ぎょうせい.
- 田島信元 (2003) 『共同行為としての学習・発達：社会文化的アプローチの視座』金子書房.
- 館岡康雄 (2006) 『利他性の経済学：支援が必然となる時代へ』新曜社.